

近世高田派教学の研究 要旨

栗原 直子

本論文のねらい

近世は日本仏教界全体が江戸幕府の学問奨励を背景とした教学振興の時代を迎えており、真宗でも各派において盛んな教学研究が行われている。たとえば本願寺派では、寛永十六年(一六三九)に学寮(学林)が創設され、以後本願寺派教学における研究及び教育の中心機関として、宗学の研鑽や教学にまつわる議論などが盛んに行われている。また大谷派でも、寛文五年(一六六五)に学寮が創立され、宝暦四年(一七五四)の移転後は高倉学寮と呼ばれ、大谷派の修学研鑽の場とされた。高田派もまた、寛文十二年(一六七二)にはじめて安居が開講されてからは、宗乗・余乗共に幅広く講義が行われ、多くの学僧によって盛んな教学研究が行われたようである。

さて、この時代の学問は所謂「近世真宗教学史」として、従来多くの研究者によって注目され、その成果が発表されてきた。ところが、それらはどれも「真宗教学」の名目でありながら、大多数が本願寺派教学を中心に論じられたものであったように思われる。本論文は、この点に根本的な問題意識を有している。なぜなら、たとえば親鸞以後直弟子によって継承されてきた高田派教学は、本願寺派教学とはまた異なる教学の特徴を持って展開していると考えられるからである。「真宗教学史」と呼ばれる以上、ここには本願寺派以外の教学展開、さらにはいけば各派歴代の思想や教学上の差異、或いはその差異の上に形成された宗学が総合的に含まれるべきではなからうか。

しかしそのことを可能にするには大きな問題がある。それは本願寺派に比べ、高田派教学史には不明瞭な点が多いという現状である。しかもそれは特に近世において顕著であり、この時代の教学は派内の学者によっても十分に研究されてきたとは言いがたい。筆者はこのような現状に置かれている根本的な原因が、近世の高田派教学の一面が近代に至って他派からの批判を招く結果をもたらしたことにあるのではないかと考える。たとえばその一つとして挙げられるのが、第二章で取り上げる高田派代々法主による口伝相承を伝える書物を根拠とした秘事法門疑惑である。他派の研究者によってそのような論文が発表されたのに対して、高田派側の研究者はこれを真つ向から否定したのであるが、そこで取られた方法は、その存在そのものを否定することによって、或いは一時代限りの出来事と捉えることによって反論するものであった。しかもこれによって論議が収束した後は、敬遠するかのようにして、この話題が再び取り上げられることがないまま今日に至っている。このため今日の高田派教学の歴史はその部分で欠いた状態で、それらを前後の高田派教学の歴史と結びつけないままに構築されたものといえ、このことが近世高田派が不明瞭である一つの要因となっていると思われるのである。

そこで、先哲によって排斥されてきた書物、或いは出来事に今一度検討を加えることによって、近世全般にわたる高田派教学の展開を考察し、近世高田派教学史の再構築を試みると同時に、従来の真宗教学史上に高田派の教学を位置付けていくことを本論文のねらいとする。

以下に全体の構成と、各章の概説を示しておく。

序論

第一章 高田派教学概説

はじめに

第一節 高田派教学の特徴

第一項 高田派教学と『顕正流義鈔』の関係

第二項 『顕正流義鈔』にみる教学的特徴

第二節 従来の近世真宗教学史―普賢大円氏の所説を通して―

第一項 時代区分

第二項 各時代の学問傾向

第三節 近世高田派教学の展開

第一項 本願寺派との対比による時代区分

第二項 安居記録にみる学問傾向

第三項 他宗他派との交渉

小結

第二章 高田派教学における口伝の研究

はじめに

第一節 『十個秘事書』と秘事法門疑惑

第一項 『十個秘事書』概説

第二項 『十個秘事書』をめぐる論争

第三項 『十個秘事書』成立に関わる歴史的背景

第二節 口伝資料概説

第一項 口伝資料とその発生

第二項 従来の口伝資料研究

第三節 各書における口伝の検討

第一項 『高田絵伝撮要』

第二項 『高田開山親鸞聖人正統伝』

第三項 『高田一流宗義相承記』

第四項 『浄土真宗相承図記』

第四節 口伝に関する諸問題―口伝資料の検討を通して―

第一項 平松令三氏の所論に対して

第二項 近世初期高田派における口伝のあり方

小結

第三章 高田派における復古運動の研究

はじめに

第一節 復古運動概説

第一項 円遵と真淳

第二項 復古運動の時代背景

第二節 『下野伝戒記』と『下野大戒秘要』

第一項 『下野伝戒記』

第二項 『下野大戒秘要』

第三節 復古運動を構成する思想構造

第一項 親鸞と法然の戒律観

一、親鸞の戒律観

二、法然の戒律観

第二項 戒の性格

第三項 戒と念仏と信心の関係性

第四節 復古運動と口伝

第一項 「唯授一人口訣」とは

第二項 「浄肉文」との関係

小結

第四章 近世後期高田派教学の変遷―復古運動以降の再検討―

はじめに

第一節 円祥の著述にみる復古運動の影響

第一項 『宣教護国論』と伝戒論

第二項 『宣教護国論』と『宣教護国論犀如意』の関係

第二節 『宣教護国論犀如意』の検討

第一項 『宣教護国論犀如意』の内容とその特徴

第二項 筆削とその意図

第三項 書写とその背景

第三節 高田派における安心惑乱とその背景

第一項 慶応安心惑乱に至るまで（安政の内乱）

第二項 慶応安心惑乱概観

第三項 慶応安心惑乱にみる他派からの影響

小結

結論

第一章 高田派教学概説

本章では、本論文の主題に入る前に、近世の高田派がどのような教学的特徴を有し、またどのような過程で展開していたのかを、まずは近世全般にわたって概観した。その上で第一節では、高田派所依の聖教の一つである真慧の『顕正流義鈔』によって高田派教学の特徴を確認した。本節の内容は従来の高田派教学研究において再三論じられてきたことであるが、その特徴が近世にはどのように捉えられていたのかを知る意味で、その比較材料としてまず確認しておく必要があった。すなわち『顕正

流義鈔』に示されるその特徴とは、一般的に真宗は信心を正因とし、称名を信心獲得後の報恩行と捉えらるゝとされるのに対して、信心と称名とが共に具わったところが往生決定であると捉え、信行具足の称名念仏を重視するものである。なお、この立場は今日においても高田派の学問的特徴とされている。

さらに続く第二節では、本願寺派を中心に構築された所謂近世真宗教学史を概観し、それを参照することによって、第三節では近世高田派教学を①第一期「先駆け時代」、②第二期「発展時代」、③第三期「復古運動以降」の三期に大別した。そして引き続き本願寺派と高田派の流れを比較しながら、時代ごとの学問傾向を概観した。

〈本章の成果〉

本願寺派からおよそ数十年の遅れは取るものの、高田派でもまた教学研究の隆盛に伴い安居や学問の場が漸次整備されていった。すなわち①先駆け時代には安居の整備、体制ともに未発達であったものが、②発展時代には多くの聴衆が宗乗・余乗を学ぶために集まるようになり、それまでの講堂では手狭になるほど教学研究が興隆したことによって勸学堂が建立されている。このことがきっかけとなり、③復古運動以降は安居の内容も充実し、本講・内講・寮講の三部の講義によって構成され、宗乗・余乗がどちらか一方に偏ることなく配分される等、その形式も格段に整備されていたことがわかった。また特に②発展時代以降は他宗他派との交渉も盛んで、勸学堂竣工以後は本山においても他宗の学僧を招いて講義が行われており、一般の聴衆にも他宗の教義に触れる機会が与えられていたことも明らかとなった。このようにして宗派を超えた幅広い学問が行われていたのが近世中期以降の高田派教学の実態である。ところが第三期の後半になると慶応安心惑乱と呼ばれる教学論争が起り、これによって三業惑乱以降の本願寺派同様、高田派でも宗学研究が中心に行われるようになっていった。その様子は安居記録の講本の内容からも顕著であった。以上が表面上にあらわれたところの近世高田派の学問的展開であった。

第二章 高田派教学における口伝の研究

本章では、高田派法主による口伝相承を伝える書物を、その性質から大きく二種類に分けて考察した。まず一つ目の『十個秘事書』は、近代における高田派秘事法門疑惑の論争の発端となったもので、真慧の口伝による秘事伝授を伝えるものである。これについては先哲の研究によって偽作であることは明白であったことから、本書をめぐる諸氏の見解をまとめ、秘事法門疑惑の根本的な問題の所在を明らかにし、さらに本書成立の背景を高田派の歴史の上に概観した。

続いて二つ目の、親鸞以降、真仏、顕智、専空ら面授の弟子に始まる高田派歴代法主による口伝相承を伝える書物群（本論文では口伝資料と称す）は、前者の『十個秘事書』とは成立時期、内容ともに大きく異なるものの、口伝を伝えていることと、その口伝の一つである「唯授一人口訣」が秘密めいた表現であることから、派生的に秘事法門疑惑の根拠の一つと位置付けられたものである。これについては先哲の論拠にいくつかの問題点がみられることから、『高田絵伝撮要』（以下『撮要』）、『高田開山親鸞聖人正統伝』（以下『正統伝』）、『高田一流宗義相承記』（以下『宗義相承記』）、『浄土真宗相承図記』の以上四冊の口伝資料に焦点を絞り、各書の比較研究を通して筆者の私見を提示した。

〈本章の成果〉

口伝資料が伝える口伝の内容については、各書によってそれぞれ違いがみられるが、およそその中心となるのは時機相応・女人往生勧発・唯授一人口訣からなる三つの口伝であった。このうち時機相応と女人往生勧発は、本章において親鸞の妻帯に関するものであることを明らかにした。また従来その内容が不明とされてきた「唯授一人口訣」については、本章での検討に加え、次の第三章の復古運動関連資料の検討を通して、その内容が戒体の秘訣であると考えられることを明らかにした。

また第四節では、これら口伝資料にまつわる諸問題を検討した。平松令三氏は、『正統伝』の中から三つの口伝を伝える箇所のみを取りまとめたものが『宗義相承記』であると位置付け、その内容がそれ以前に成立したと考えられる『撮要』の口伝の内容と異なることから、三つの口伝はすべて『正統伝』の著者良空によって作爲的に作り上げられたものであるとの見解を示し、口伝そのものが彼によるでつち上げである等として秘事法門を否定した。以後、それに反論するものはなく、以来この見解でもって高田派秘事法門疑惑は解消することができたと考えられてきた。しかし『宗義相承記』と『正統伝』の内容に検討を加えたところ、『宗義相承記』には『正統伝』にはない見解が示されていることがわかり、また逆に『正統伝』の口伝を伝える上での特徴的表現である「入親鸞位」なる言葉が『宗義相承記』では一切使われておらず、両書が伝える口伝の内容に決定的な違いがあることは明白であった。これによって良空が作り上げたのは口訣相承を受けた者を表す「入親鸞位」なる表現と、高田派の正統性を主張する文言のみであって、口伝そのものに関しては平松氏の所論が成立しないことを指摘した。

さらに、以上のような口伝資料の実態から、高田派教学史の一部分に口伝を重視する傾向が存在したことが事実として認められなければならないことを強調すると共に、その背景には常に他派に対する対抗意識と、高田派のみが所有していたと考えられる、口伝の根拠となる何らかの資料が存在したことを指摘した。

第三章 高田派における復古運動の研究

本章では、近世中期の高田派において行われた復古運動に焦点を当て、その背景や意図、或いはそれによって提唱された教学の特徴を考察した。そもそも近世は、仏教の再興をはかろうと各宗にわたって同様の趣旨の運動が行われた時代であった。復古運動の中心人物の一人であった学僧真淳（一七三六〜一八〇七）は、二度にわたる京都遊学の際に結んだ他宗の学僧との交渉を通してこの運動への意欲を高めていったと考えられる。またもう一人の中心人物である第十八世法主円遵（一七四八〜一八一九）は、僧侶の墮落によって乱れた宗門を立て直そうとの志を早くから抱いていたと思われ、彼らの意志が一致したところにこの運動は起こったものと考えられる。つまり他宗からの影響と当時の宗門の実状とを背景として起こったのが、この復古運動であったといえる。この運動で主張されたのは、高田派代々法主による伝戒相承を根拠とした、精神面での戒律護持の重要性であった。真宗で戒律を取り上げるといふ特異性のためか、高田派の教学史研究上ではこれまであまり注目されておらず、その内実については不鮮明な点が多い。そこで本章では、真淳が円遵の命により運動に伴って著した『下野伝戒記』と『下野大戒秘要』を通して復古運動において提唱された伝戒論の内容を考察し、さらに真淳のその他の書物と照らし合わせながら、真宗教義の上でそれがどのように展開されていたのかを論じた。

〈本章の成果〉

他宗における仏教復興の運動は、日本仏教における戒律の弛緩が仏教の墮落をもたらしていると思えることよって、戒律復興運動といったかたちで取り組まれていくのであるが、高田派において戒律が取り上げられていることについては一概に他宗からの影響によるものとは言い難いことが明らかとなった。すなわちそれは、「復るべき古」である親鸞の深い自己内省の根底に、確固たる戒律への意識が内在していたと捉えたことに端を発するものであると思われる。そのような親鸞の戒律観を背景として行われたのがこの復古運動であり、その本来の意図は、実際に戒学に触れることを通して、戒律を持つことも、悪念が催したその時に懺悔念仏することさえもままならない煩惱具足の自己を自覚すると共に、慎みある念仏者の姿を説き示すところにあつたことを指摘した。

しかしその教学は、戒を念仏との関連の上で捉え、宗義に即したものととして展開していくところにその特徴があり、名号を戒体とし、その戒体であるところの名号を称える称名念仏はそのまま戒律護持につながるものでもあつた。しかも真慧の所説を根拠として、他力回向の信心を得たところに報謝の称名念仏が具わると同時に防非止悪の戒徳が具足し、このときに往生が決定すると捉えるものであつた。このような学説が圧倒的な指導力を誇っていた真淳や法主の立場にあつた円遵によつて提唱されたわけであるから、後の時代には様々な影響を及ぼしたのではなからうか。そこでこのような仮説を実証すべく、その後の時代に検討を加えたものが次の第四章である。

第四章 近世後期高田派教学の変遷―復古運動以降の再検討―

本章では、復古運動直後の時代から、復古運動以来の教学的転機といわれてきた近世末期の慶応安心惑乱に至るまでの高田派教学の変遷に検討を加えた。復古運動が収束した後の宗門を担った第十九世円祥（一七八八―一八三七）は、その主著『宣教護国論』が前法主円遵から戒法の教義が完璧にまとめられた書物であるとの高い評価を得たといわれていたこと等から、復古運動によつて提唱された学説を受け継いだ人物と考えられ、これによつて復古運動直後の時代の教学は「前時代の延長」であるといわれてきた。それによつて本章ではまず、この『宣教護国論』を講義するに当たり円祥が講義口録として著したと考えられる『宣教護国論犀如意』を繙くことによつて、『宣教護国論』には従来知られていなかった成立背景があることを明らかにし、そこに教学面の変化がみられることを指摘した。

また第三節では、慶応安心惑乱についても、従来の教学論争としての一面的な見方による検討だけではなく、その時代背景として第二節までで検討した復古運動以降の歴史的展開と教学的展開とを考慮し、さらに真宗他派からの影響も視野に入れて考察した。

〈本章の成果〉

円祥は復古運動の主題であつた念仏者の内面性の問題や当時の学問傾向に対して円遵らと同様の問題意識を抱き、その問題意識を共有していたと考えられることから、その点では確かに前時代のそれを継承していたといえる。しかし、今回『宣教護国論犀如意』の検討を通して、復古運動直後の時代に、円祥によつて真淳の学説が取捨選択され、新たな形で提示されていたことが明らかとなった。さらに、その取捨選択の背景が記された『宣教護国論犀如意』が円祥の示寂後に書写されていることに注目することによつて、従来復古運動以来の転機と考えられてきた慶応安心惑乱よりも以前に、す

に真淳らの学説に異見を唱えるものが表面上に現れ出していた可能性を指摘することができた。

また第三節では、慶応安心惑乱が起こった背景に、以上のような復古運動以降の高田派教学の実態に加え、さらに本願寺派で起こった三業惑乱からの影響があることを指摘した。すなわち従来の学説に否定的であった人々（北派）は、復古運動の学説に反発するかのようにして同じ時期に三業惑乱を経た本願寺派で「信心正因、称名報恩」がより明白に打ち出されたことに注目し、「信心正因、称名報恩」こそが高田派の安心であると主張するようになり、従来の信行具足の称名念仏が高田派の正統であると主張する人々（南派）との意見の相違が直接的な原因となつて慶応安心惑乱が起こったと考えられる。またさらに、信行具足の称名念仏を重視する高田派の教学的立場は古来も今日も変わっていないにも関わらず、この惑乱では最終的に「信心正因、称名報恩」に裁断が下っていることから、様々な内部事情を有した当時の高田派に与えた三業惑乱の影響力が多大なものであったことを指摘した。

本論文の結論

本論文は主に先哲によって否定された口伝相承と、従来の教学史研究上あまり注目されてこなかった復古運動という出来事を再考するところに主眼を置き、それに基づいて後の時代に今一度検討を加えるものであった。

口伝については、近代の秘事法門疑惑によって口伝資料そのものが無益なものとされてしまったことよって、口伝が重視された時代があつたことまでもが高田派教学史から姿を消してしまつていた。しかし口伝によって伝えられたとされる内容自体が事実かどうかに関わらず、高田派において口伝という法門伝授の形態そのものが尊重され、価値を持つていた時期があつたという事実は、紛れもなく高田派教学の歴史の一側面であり、そのことを考慮することは教学史研究において必要な作業であつたと考える。ところで近年の研究においては、近世の出版文化の発達に伴い、中世の写本を中心とする口伝法門重視の学問観が衰退したとする指摘がなされており、同様のことは近世初期の本願寺派においても指摘されている。しかし高田派では、近世初期に成立した書物において口伝はなお重要な位置付けにあり、それが中期の復古運動の展開にも繋がっていることから考えると、少なくともこの中期頃までは教学的にそれなりに重要な位置付けを保つていたものと思われる。ところが復古運動以降の時代になると、口伝資料の書写こそなされてはいるものの、この頃に著された書物から「口伝」の文字は姿を消しており、近世後期頃にはすでに高田派教学においても口伝は衰退していったものと考えられる。

このことは、口伝によって伝えられたとされる伝戒相承を根拠として展開された復古運動の学説に對して否定的見解を示すものが、復古運動の直後の時代に現れていることから明かである。この頃にはすでに口伝が教学的価値を失つており、そこに復古運動で提唱された学説が有する特殊性や異見は受け容れられない等の事情が影響し、さらに本願寺派の三業惑乱からの影響を受けたものがいたことよって、ついに復古運動が派内に残した学説や影響は廃れていったのである。このことが高田派教学史において復古運動があまり注目されてこなかった直接的な原因となつていると思われる。しかしこの復古運動は、決して単なる一時代の出来事ではなかった。そのことは高田派における教学論争である慶応安心惑乱に顕著にあらわれている。

では今日の高田派はどのような教学的特徴を有しているかという点、それは口伝相承の事実を語る

わけでも、伝戒相承の事実を語って戒律護持の重要性を主張するわけでもないが、「信心正因、称名報恩」を安心とするわけでもなく、やはり真慧によつて明確に打ち出された信行具足の称名念仏を重視するものであることは明白である。ここに筆者は重大な意味があると考ええる。すなわち以上のような歴史的展開を歩んだ上で構築されたものであるからこそ、「信行具足の称名念仏」という高田派の教学の特徴が、一般的に所謂真宗の安心といわれる「信心正因、称名報恩」の影響を再び受けることなく、確固たる高田派の教学として今日も語られているのであると考える。

以上のように所謂真宗教学といわれるものと高田派教学の違いを明白にすると共に、将来のより確固とした高田派教学史構築を志向して論じたものが本論文である。